

ひょうごの遺跡

平成12年9月30日発行
兵庫県教育委員会
埋蔵文化財調査事務所
神戸市兵庫区荒田町2-1-5
〒652 TEL078-531-7011
-0032 FAX078-531-7014
ホームページアドレス
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~maibun-bo/>

古代船団但馬に現る！

出石郡出石町袴狭遺跡出土線刻画木製品の公開

平成12年4月、出石町袴狭^{はかさ}遺跡から出土した木製品の保存処理作業中に、船の線刻画のある木製品（板材）が見つかりました。突如として日の目を見ることになったこの木製品は、平成元年2月に行われた袴狭遺跡の確認調査の時に出土していましたが、これまで誰の目にも注目されることなく、10年以上も水槽の中で眠っていたのです。

今回は、新たに発見された線刻画木製品と、そこに描かれた「船」について詳しく報告します。



【袴狭遺跡とその調査】

袴狭遺跡は兵庫県の北東部、但馬地方の出石郡出石町にあります。円山川は但馬地方の中央を日本海に向かって北に流れていますが、その支流である出石川のさらに支流の袴狭川の流域にあたります。遺跡から日本海へは直線距離にして約18kmあります。

但馬地方の中央の豊岡盆地には、円山川と出石川に沿って形成された低湿な沖積平野が広がり、丘陵や段丘など小高い所はほとんどありません。盆地のまわりには、小河川によって大小さまざまな谷が多数形成されており、袴狭遺跡のある谷は、豊岡盆地東部にある比較的大きな谷で、西側以外の三方を、標高150m前後の山によって囲まれています。平野部の広さは南北約620m、東西約170mで、東から西へ緩やかに傾斜しています。袴狭遺跡はこの平野部の南側の山裾を流れる袴狭川沿いの標高約5～10mの低湿地に、広がっています。

袴狭遺跡は、北側にある砂入遺跡とともに、奈良～平安時代を中心とする時期の木製品、特に人形・馬形などの木製祭祀具が多数出土する遺跡です。袴狭遺跡で出土した木製品約13,000点のうち、4割以上が木製祭祀具です。そして、木簡などの遺物や遺構の検討から、袴狭遺跡は、第1次但馬国府や出石郡衙との関連が強いと考えられています。

一方、弥生時代から古墳時代の遺跡の様子は明らかではなく、水田とそれに伴う井堰、溝などが確認されているだけです。この時期のものとしては、若干の土器と、今回報告するA「線刻画木製品」のほか、田下駄や容器、部材、木製穂摘具、櫛、椅子などの木製品が出土しています。琴板と推定されているB「箱形木製品」や、C「帯を組み合わせたような模様のある板」など注目される木製品も出土しています。



袴狭遺跡の位置（日本海と円山川）
「鳥取」1：200,000地勢図より

船団の姿を後世に

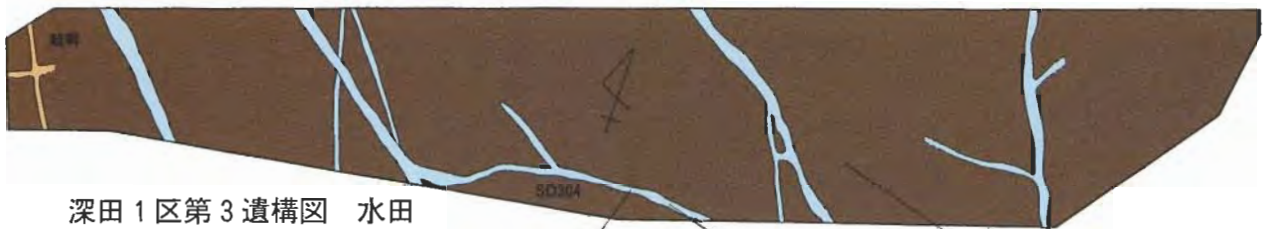
高級アルコール法による木製品の保存処理



今回紹介した線刻画木製品は、高級アルコール法で保存処理をしました。高級アルコール法とは遺物に高級アルコールを浸み込ませる方法です。

まず、遺物に含まれる水分を水溶性のアルコールと置き換え、さらにそのアルコールを高級アルコールにゆっくりと置き換えます。

ちなみに、高級アルコールとは「高価なアルコール」という意味ではなく、「分子に多くの炭素数をもつ」というものです。高級アルコールは水に溶けないため、処理後の遺物も湿気に強い特長があり、展示するにも適しています。



深田1区第3遺構図 水田



A 線刻画木製品 (表面)



(裏面)



C 帯を組み合わせたような模様のある板



B 箱形木製品

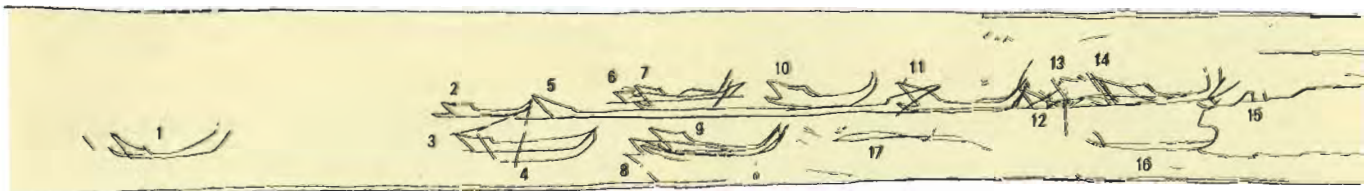
木製品出土位置

【線刻画木製品の出土状態】

線刻画木製品は、平成元年、袴狭遺跡（当時は坪井遺跡と呼んでいた）の確認調査の際に、暗褐色腐植土層から、多くの板材などとともに出土しました。その後、平成5年に本発掘調査が行われ、深田1区第3遺構面の水田に伴う溝(SD304)からの出土であることがわかりました。この溝の幅は1m前後、深さ10~20cm、長さは確認できた部分で約53mです。同じ溝からは「帯を組み合わせたような模様のある

板」が出土しています。

調査面積に比べ土器の出土は少なく、また単独で時期が特定できる木製品も少ないため、年代の決め手がなく、この溝の時期は限定できません。しかし、各遺構面での土器の組み合わせ、上層の第2遺構面に奈良~平安時代の木製祭祀具が含まれていない点、同じ第3遺構面から木製穂摘具が出土している点などから、おおよそ弥生時代後期から古墳時代前半の溝であると考えています。



船団線刻画

【線刻画と板材について】

線刻画木製品は、現存長197.3cm、幅16.2cm、厚さ2.0cmの板材で、樹種はスギ、木取りは板目どりで、一方が欠けており、本来はもっと長かったようです。片側には折るための加工痕がありますが、それ以外は特に表面を調整した痕跡はなく、両面とも木目による段が残されたままです。また、目釘穴やほぞ穴などもなく、何に使われたのか用途は不明です。

線刻は表裏両面に描かれており、ここでは仮に船が描かれている側を表面としておきます。表面には、船の線刻が長さ約108cmにわたって描かれています。

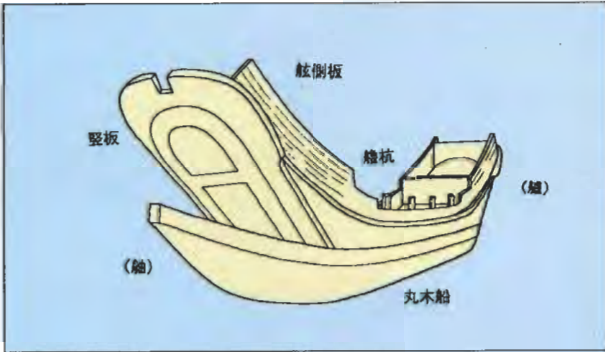
描きかけのものや、線が重複しているものもあり、不明確な部分もありますが、上図のように16の船に分けて扱います。

【全体の構図】

左端の1隻だけの部分と、やや離れて複数の船からなる部分の大きく2つに分かれています。さらに後者は木製品の中央にある横方向の線によって、上下に分かれています。上段の線刻は中央の横線を水面に見立てて「基底線」として、船が描かれていますが、この横線は当初に一気に引かれたものではなく、船底の線を左から右に順に継ぎ足して引かれています。すなわち「心の基底線」を意識して描いた



船団線刻画（左端）



準構造船（古代船「なみはや」参照）



船団線刻画（中央その2）

結果、このような長く通る線になったのでしょう。下段の線刻は板の端を水面に見立てて基底線としてあるのかもしれませんが。

また、斜めに立ち上がる縦板の表現のある左側を舳（船首）とすると、確認できる船はいずれも左を進行方向としています。

【それぞれの船】

もっとも基本的な形の船は10番です。描かれているのは、丸木船に舷側板と縦板を組み合わせる「準構造船」です。舳には横からみた丸木船と縦板が描かれ、舷側板が舷側板の上部から艀（船尾）側に続いています。艀杭（船を漕ぐ艀の支点となる突起）は表現されていません。艀には斜め前からみた大きく反り上がる舷側板が描かれています。このように、舳と艀とでは描く視点が異なった多視点画であるといえます。すなわち、実物の船を前にして描いた写生画ではなく、頭の中で形づくられたものを板の上に表現したイメージ画です。舷側板の中央やや舳寄りには、段状に中央部が下がっており、舳側の舷側板が一段高くなっていることが表現されています。

また、5・6番の船のように丸木船が描かれていないものがあります。底の線が前後にはみ出しており、水面を表したかのようです。このタイプには37.0cmの大型のものもあります。舷側板の段状表現

も舳側に片寄っていますが、大型のものでは両側にあります。このように、大きく2つの形態が描かれており、これまで船形埴輪などで指摘されている2種類の形態に対応します。

5番の船は特別大きく描かれており、実際に大きな船を描いたとも考えられますが、イメージ画では「大切な部分を大きく描く」ことがよくあり、大きく描くほどの特別な意味のある船だったのかもしれませんが。船の形も他の船と異なっています。奈良県東殿塚古墳の鱗付円筒埴輪に描かれた3隻の船も丸木船のない船が大きく、丸木船のある船は小さく描かれています。

6番の船は、7番の船を避けて、後から重ねて描かれています。普通、イメージ画では重なり合うことがなく、何らかの意味があって、重ねて描いたようです。違った形・長さ・高さの船を重ねていることにも意味があるのでしょうか。

3番の船の舳と2番の船の艀を結ぶ線は、無目的に偶然引かれたものでなく、板材の年輪による段を越えて継ぎ足して引かれています。何を示すのかは明らかではありません。

16番の船は丸木船と舷側板を表したところで描くのを中断しており、丸木船・舷側板の順で描いていたことがわかります。また、ほとんどの船は一



船団線刻画（中央その1）



船団線刻画（右端）

気に描かれているのに対し、14番の船は縦板および艫の舷側板を数回書き直しています。11番の船も同様に舷側板を書き直しています。

17の番号を付けた画については他の画のように完全な船の形をしていません。全体の長さは他の船の画と変わりませんが、壊れたヘアピンのような形をしています。魚を現しているのでしょうか？

板材の裏面には、中央やや右よりの位置に上下でほぼ対象的な画が描かれています。一見すると銅矛のようにも見えますが、極端に象徴的に描かれており、何を表したものは謎です。

【線刻画の示すもの】

以上のように、線刻はいわゆる多視点画といわれるイメージ画ですが、縦板と丸木船の表現、舷側板の段状表現など、これまでに知られている埴輪の船の絵などと共通する特徴があり、全くの空想の産物である非現実的な絵ではありません。

問題となるのは、単体の船をイメージし、それを複数描いた結果、16隻の船が描かれたのか、当初から16隻またはそれ以上の船団をイメージして描いたのかです。また、船団の中に大型の船が存在したことを示そうとしたのか、あるいは重要さを大きさで表現したのかという点も問題となります。これまで多く知られている個別の船ではなく、船団としての「状況」を示す絵画であるならば、重要な意味があ

りますが、線刻の描かれた板は特に加工もされていません。一方、年輪による段をまたぐ線を引きしている点など、描き手の明確な意志も感じられます。描きかけの船もあるように、落書きのように規制にとらわれず自由に描いたからこそ、これまでの絵画にはない多数の船を描いたのでしょうか。

お知らせ

線刻画木製品の公開

日時 平成12年10月11日(水)～15日(日)

午前10時～午後5時

場所 兵庫県立文化体育館アートギャラリー

講演会と学術座談会

日時 平成12年10月15日(日)午前11時～午後4時

場所 兵庫県立文化体育館多目的ホール(2F)

講演会 佐原 真 (国立歴史民俗博物館長)

「古墳時代の船の絵」

学術座談会 「古代船団但馬に現る！」

佐原 真 (国立歴史民俗博物館長)

工楽善通 (ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所部長)

松木 哲 (神戸商船大学名誉教授)

中村 弘 (兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所主任)

主催 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所・兵庫県立文化体育館

古代人に挑戦

土器を作ろう

私たちの生活に欠かせない「やきもの」には、土器・陶器・磁器といったいろんな種類があります。現在私たちが一般的に使っている「やきもの」は、表面をガラス質の釉薬で覆った陶器と、1000度以上の高温で焼かれて全体がガラスのようになった磁器で、固くて水漏れのしないものです。しかし、「土器」は陶器や磁器より低温の600～800度程度で焼かれているため、もろく、水漏れするなどの特長のある原始的な「やきもの」です。

日本で土器づくりが始まったのは、縄文時代が始まった今から1万2千年前頃です。世界的に見ても、このように古くから土器が作られた例はなく、縄文土器は「世界最古の土器」と言えます。



【乾燥】

焼く前に、日光や風雨があたらない場所で、1月ぐらい乾燥させます。急激に乾燥させるとひび割れてしまいます。

【土器を焼く】

中国雲南省で最近まで使われていた方法で行ってみました。薪をスノコ状に置き、その上に小枝を敷きます。土器はこの小枝の上に置き、その周りに藁束を立てかけます。藁束の上に「壁土」を塗り、全体を覆います。窯の出来上がりです。煙突として天井に5cm程度の穴を4箇所作り、裾には焚き口として半円形の穴をあけます。焚き口に新聞紙を置き、火をつけます。団扇で少し風を送り、窯内全体に火が回るようにします。急激に温度を上げて、土器が割れないよう注意します。8時間放置した後、できあがった土器を取り出します。



【粘土で土器の形を作る】

材料は市販の粘土（テラコッタ粘土）を使用しました。少し砂の混じった粘土です。土器を1個作るのに、約1kgの粘土が必要です。回転台を使用しましたが、なければ20cm角の板でも可能です。

まず、直径7cm程度の粘土の円盤を作ります。それに直径約1cmの「粘土ひも」をつくり、円盤の縁に積み上げ、土器の形を作ります。このとき粘土の継ぎ目はしっかり指で押さえ、空気が残らないようにします。また、土器の厚さは底の方を厚めにし、これより上は均一になるようにします。木や竹で、土器の表面や内側を削ったり、撫でて、水を漏れにくくしましょう。また、麻縄で、表面に文様もつけてみましょう。



東播磨ふるさと歴史楽習より

夏休み、日頃の知識と経験を生かして、こどもたちと一緒に古代の人たちの仕事に挑戦してみました。(写真 播磨町郷土資料館)

石器を作ろう

人間がはじめて作った道具は石器です。約250万年前の事です。アフリカで発見されています。日本では約60万年前の石器が東北地方で見つかっています。

石器には大きく2種類のものがあります。1つは石を石で叩くことによって作る「打製石器」で、もう1つは石を石で磨いてつくる「磨製石器」です。

今回は2種類の石器を作りました。打製石器の「ヤリ先」と磨製石器の「石包丁(石製穂摘具)」です。



【石包丁を作る】

石包丁の素材として、今回は「結晶片岩」を使用しました。この石は、四国の徳島県徳島市の鮎喰川あくいがわの河原で採集した石です。厚さ2cm、長さ7cmぐらいの大きさのあらかじめ用意した石を、洲本市由良海岸で採集した平たい砂岩の上で、一生懸命、ひたすら磨いて、石包丁の形と刃の部分を研ぎ出します。このときには水をかけながら磨きます。

1時間ほど磨いて形が整い、厚さも薄くなってきたら、次は孔あけ作業です。ヤリ先を作っている途中でできたサヌカイトの破片の中から、とがったものを選び出し、その先で、グリグリと孔を開けます。片面からまず孔を開け始めます。厚みの半分ぐらいを過ぎれば、今度は反対の面から開け直します。両面の孔が食い違わないよう、孔の位置に注意します。1つの孔を開けるのに30分から1時間ぐらいかかります。孔が2つあけば、ひもを通し、指から落ちないようにして石包丁の出来上がりです。



【ヤリ先を作る】

ヤリ先の材料は、「サヌカイト(讃岐石)」という石で、四国の香川県坂出市五色台付近で採集したものです。長さも幅も20cm、厚さ5cm程度のサヌカイトの塊を、拳ぐらいの大きさの砂岩の丸石で叩き割り、薄い板状の破片(剥片)を数枚作ります。その中で気に入ったものをヤリ先に仕上げます。このときも砂岩の丸石を使いますが、3cm程度のもので、慎重に叩いて細かく加工し、先をとがらせます。力強く叩いてしまうと、せっかくのヤリ先が、粉々になってしまうからです。ヤリ先が完成すれば、細い竹の棒の先に取り付けます。竹からヤリ先がはずれないように、たこいと 尻糸でしっかり縛って出来上がりとなります。1時間程度で完成です。



古代体験教室より

企画展のお知らせ

「阪神・淡路大震災と埋蔵文化財VI～記録された復興調査～」

有鼻遺跡など、復興調査の成果の一部は、すでに報告書として刊行されています。また兵庫津遺跡など、現在整理中の遺跡もあります。今回の展示では、遺物などの展示とともに、報告書も展示し、閲覧できるようにいたします。

期間 11月より
場所 埋蔵文化財調査事務所 2階展示室



瀬戸・美濃系陶器（兵庫津遺跡）



現地に設置された解説板



文化財愛護シンボルマーク



有鼻遺跡空中写真



木簡（三条九ノ坪遺跡）

「阪神・淡路大震災と埋蔵文化財シンポジウム記録集」（平成11年12月開催）発行のご案内
A 5 版横組 200頁
平成13年 1 月刊行予定
※お問い合わせは兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所内『阪神・淡路大震災と埋蔵文化財』シンポジウム実行委員会事務局（TEL 078-531-7011）まで

編集後記
数年ぶりの酷暑の夏も過ぎ、実りの秋、燈火に親しむ季節がやってきました。秋から冬にかけては、発掘作業・整理作業ともがんばり時です。誰もが忙しい毎日に流されがちですが、ふと立ち止まってあたりを眺めてみれば、以前見過ごしていたものから思いもかけない発見があるのではないのでしょうか。たとえば今回の船の絵のように。